

## 彩色屋

〔Ⅰ〕今年（平成 23 年）元旦の新聞第一面に、元女優・高峰秀子さんの訃報が載りました。

『二十四の瞳、浮雲、放浪記など数々の名作に主演し、戦後を代表する女優の高峰秀子さんが 12 月 28 日午前 5 時 28 分、肺がんのため亡くなった。86 歳だった。

葬儀は近親者だけで行った。喪主は夫の映画監督・松山善三さん。高峰さんは 10 月下旬に突然体調を崩し、東京都内の病院に入院。12 月 27 日頃から病状が急速に悪化した』

右の文章が、高峰秀子主演の映画・放浪記で 70 秒の間アップします。彩色屋の女将がとても厳しく女性の強制労働を感じさせる映画です。これは林芙美子の実話です。



林芙美子原作 放浪記（彩色屋の場面）抜粋

（11 月 X 日）私は毎日、玩具のセルロイドの色塗りにかよっている。日給は 75 銭也の女工さんになって今日で 4 ヶ月。私が色塗りをした蝶々のおさげ止めは、今頃はどこかへ散乱していつていることだろう。

ここは、女工が 20 人、男工 15 人の小さなセルロイド工場だ。鉛のように生気のない女工さんの手からキュウビーがおどけていたり、夜店物のお下げ止めや前芯帯や、さまざまな粗製品が毎日毎日、私達の手から市場へ流れてゆくのだ。朝の 7 時から夕方 5 時まで、私達の周囲は、ゆでイカのような色をしたセルロイドの蝶々やキュウビーでいっぱいだ。

（11 月 X 日）いつまでたっても、セルロイドの臭いにセルロイドの生活だ。朝も晩も、べたべた三原色をぬりたくっている。

（12 月 X 日）二寸ばかりのキュウビー一つごまかして来て二畳の部屋の茶棚の上に載せてみる。私が産んだ キュウビーさん。冷や飯に味噌汁をザクザクかけてかき込む寂しい夜食です。

〔Ⅱ〕今年、平成 23 年 2 月 8 日の朝刊に、豊田正子さん死去、ベストセラー「綴り方教室」の見出しの訃報が載りました。

『小学生の時の作文をまとめた「綴り方教室」がベストラーになった作家の豊田正子（とよだ・まさこ）さんが、閉塞性黄疸で昨年 12 月 9 日に死去したことが 7 日、分かった。88 歳だった。「綴り方教室」は 1937 年に出版。昭和初期の下町に住むブリキ職人一家の生活を綴って話題を呼び、豊田さんは天才少女と評判になった。38（昭和 13）年に映画化され、主演の高峰秀子は天才子役と言われた。

「綴り方教室」は 1995（平成 7）年に、続編と合わせて岩波文庫から「新編 綴り方教室」として出版された』

〔Ⅲ〕 「彩色コーナー」の設置

高峰秀子と豊田正子の訃報に接し、セルロイドハウス横浜館に「セルロイド彩色コーナー」を設けることにしました。

### 彩色屋から抜粋（豊田正子原作）

小学校4年生も終わりの3月に、同級の渡辺しめさんが、私と中沢さんに

「あんた達、学校から帰って何んにも用ないんでしょ。もしなかったら、あたしの行っているところへきて働けば」と言った。

「わたしの仕事はね。セルロイドで、ほら、お人形さんの手や足ね、あれが、このくらいの大きさのセルロイドに、いくつもあるの、それを」

と言いながら、両手で何か千切るような様子をして、

「ばらして削ったりなんかするのよ、やさしいわ、その家ね、第一工場と、第二工場にわかれていてね、第一は兄さん、第二は弟で兄弟でやってんのよ」

と話してくれた。

私が、

「渡辺さん、その工場どこにあるの」というと、

「え、工場、工場はね、註①渋江のお宮様の裏よ。ねえ、中沢さんと豊田さんいかない、ね、いきなさいよ、行くんなら、あたし聞いてやるわ」といつてくれた。

—中略—

あくる日、学校へ行って渡辺さんに「行く」言ったら、

「あら、そうお。中沢さん、も行くって言ってたわ。あたしがねえ、きのう聞いたのよ。したらさ、うちはもう手が多いから、第一工場なら入れるって、第一工場だっていいでしょ」と言った。私は

「ええ、どっちだっていいわ、中沢さんも第一工場だかっていう所でしょ。でも、そこの仕事むずかしいかしら」

と言うと渡辺さんは、自分でうなずきながら、

「大丈夫、大丈夫、さいしき・彩色よ、お人形さんに色ぬるのよ、面白そうよ」と言いました。

私は嬉しくなって、

「あらそうお、そんなら、よくさ、玩具屋で売っているようなの、口や目を入れたりするんでしょ、きつと面白いと思うわ」と言いました。

—中略—

原っぱを越えて、1メートルぐらいのドブの前に、茶色く

ぬった波トタンの塀がまわっている家がある。塀には白いペンキで手のひらほどの太さで、小林工場と書いてあって、小林と工場との間に「大八という紋」を入れてあります。

左方は二階建ての住居があって、住居からつづいて、夜番小屋のように事務所らしいのが出ている。事務所の入り口に自転車が2、3台あって、中に人が5、6人いるようだった。

事務所のガラス越しに、開けはなしの、トタン造りの、セルロイドの大きな人形が積んである部屋に白いカッポ一着を着た人が2、3人見えて、その部屋のとなりは、註②プレス場でゴーゴーと火の音がして、時々ザザーと水を流す音が聞こえる。プレス場のわきにあるトタンばりの土間には、人形のまだ切り放しをしてないのが、バラバラにながてある。

そこに働いている人は、まだ三月なのに、ズボンしかはかないで、引きずるような長いゴムの前がけを、ぐつと後までしている。

—中略—

水タンクと向かい合いになって、二軒の全部トタン造りの家が立っている。プレス場によった方は、入口の戸の上に、註③磨き場と書いた木の札がぶらさげてあって、右方は彩色場と書いたのがぶらさげてある。

私の働くのは、ここだなと思ひながら見ていると、灰色のズボンが註④絵具だらけで、右の手の平が真っ赤で、爪じゅう黒い絵具や赤い絵具だらけの人が出て来た。

そして

「あなた方、こっちへいらっしゃい」と先に立って、彩色場の方へ行った。ぼんやりしていた私達は、あわててその後からついて行きました。

私は、彩色屋というものは、ガラス戸棚の中にいろいろな絵具が瓶に入ってズウツと並べてあって、その瓶のまわりに何色々と書いてあり、彩色する人は、台の上に品物をおいてやっいて、いろいろのお人形があって、とてもきれいだろうと思っていたのです。

入って見ると二十センチ位の花をもった、男と女の人形が、たくさんあって、人が六人ぐらい居た。

同じ人形でも、自分々々何ダースか受け持ってやっているらしく、一人々々のまわりに、多くあった。

入口の近くに、大きな註⑥竹かごが積んであって、そのそばにいた人は、黄色いガサガサな生地あじの洋服を着て立てひざをして、平っぺたい、大きな筆を動かしている。

身体を前後にふって、調子を取ってやっているようだった。

人形を一ツ取って、桃色の絵具のついた筆を、人形の脛へ トントンとぶっつけて、ちょっと持ち替え、くるくるまわしながら、スーッとぬってゆく。

とても上手だ。ぬり終えて左手にもった人形をおく間に、自分の右においてある絵具つぼの中へ右手が自然にすうッといく。次の人形を取るまでには、トップリ つぼの中につけた筆の先を、ふちでこいてしまいます。

私は、よくなれてる人だと思って感心しました。

真正面の戸には、色々な絵具がべたべたにぬってあって、その中に誰かのいたずら書きのような赤い絵具の字で火気厳禁と曲げて書いてあった。

戸のわきに半畳位の板の間があって、そこには石油缶と同じ形で、絵具で、べたべたしそうなものが三つばかりおいてあって、その缶の上に、白絵具でコチンコチンになったドンブリ鉢と十五センチほどのいちじくのような形をした物がのせてある。

入った時から、シューシューと音を立てているのは、四〇歳位の人が、マスクをして軍手をはめて、前掛けのあついのをひざにのせて、先から、絵具が霧のように出る、註⑥ピストルみたいな機械をもって、人形の首をふいていたのでした。

ふき終わった人形の首は、赤ん坊の首ほどに大きく部屋の隅に紙をかぶせてありました。

そこに、おでこの出た小さい子がちよこんとすわって、首にかぶせてある紙を一々めくっては、布ぬいで人形のほほを

こすっていました。

田中さんという人に、「あんた方かた、この仕事をやって下さい。今おしえますから」と言われた。

パイスケの中に、首をたくさん入れて前におき、後ろに空からのパイスケが二、三個おいてある。おでこの子の横に、さびた茶つぼのふたに磨き砂がはいっていて、ちよいちよい布に磨き砂をつけて、首のほっぺたをこすっている。

私は、初めどんなのが、いいんだか悪いのかわからないので、三、四個は一ツ一ツ聞きながらやった。

その仕事を全部終えると、田中さんがきて、「あんた方、こんどこれやって下さい」と言って、かごに入れた五寸いんちのパープーを持ってきた。そしてそれを、そばのパイスケに少しあげた。手のついていない、かみの毛の波になった裸人形です。

田中さんはパイスケ人形の頭をもって「これね、この窪くぼんだ所にある口をやってもらうんです。こう持って、チョンとこうゆうふうにやって下さいよ。筆を軽く使ってね」

と言いながら、パープーの口を、五、六個やって見せた。私と中沢さんは、一々うなずいて見せた。

田中さんは「はい」といって私に筆を渡した。私は何回も何回も、つけてはこき、つけてはこきしてやっという加減になったので、人形を持ってやろうとしても、筆をそばへよせると、穂先が、ぶるぶる震えてきてよく出来ない。

それでも少しやってゆくと、だんだんふるえないようになった。一打目位グース ぐいの時、筆に絵具をつけっぱなしで、こかずにそのままやったら、絵具が滴しぼのようになってたので、註⑦パープーの小さい顔中にパアッとひろがってしまった。

田中さんが来て言った。「あんた方、今日はそれで終しまって下さい。明日は日曜あすですから、朝、七時ごろまでに来て下さい」

#### [IV] 彩色屋(抜粋)文章の註〇に随って、「彩色コーナー」が出来ました

註① 渋江のお宮様 == 渋江白髭神社。江戸時代は葛飾の客人大権現と称し靈驗あらたかな神社として近郷の崇敬を集めました。境内に江戸時代の面影を残す渋江村があります。この地区には四つ木白髭神社、王子白髭神社があります。3社とも猿田彦命が祭神です。

小林工場は小林セルロイドのことですが、今は小林駐車場になっています。左方の角に創業者小林大八の後継者・治夫氏の住宅があります。

註② プレス場 == P6の平井玩具製作所の写真を掲示して、当時のセルロイドのプレス現場を想像していただくことにしました。

註③ 磨き場 == 原文には磨き砂<sup>みがきすな</sup>の作業現場を詳細に描写してありますが、紙面の都合で省略しました。ご来館の節は岩波文庫のコピーをお取りください。

註④ 絵具 == セルロイドの絵の具は、8種類の硝化綿ラッカーです。ラッカーをシンナーで溶いて絵の具として使用していました。硝化綿ラッカーの販売元は戦前から埼玉県鳩ヶ谷市の藤倉応用化工(株)です。同社はFDKと呼ばれています。FDK久喜工場長・門倉様よりラッカー缶5種を提供いただきました。

註⑤ 竹かご == 東京都葛飾区お花茶屋のセルロイド加工業者だった桐生様が、使用していた竹かごを、展示しています。

註⑥ ピistolみたいな機械 == 彩色屋では「ガン」といっています。「ガン」も、FDK久喜工場様より頂きました。

註⑦ パープーとパイスケのセルロイド人形を手配中です。

#### [V] 彩色屋の著者・豊田正子略歴(岩波文庫より)

1922(大正11)年11月、東京生まれ。本所小梅町、米屋の二階4畳半。父由五郎、母ゆき。

1929(昭和4)年、向島区牛島小学校入学。区画整理により寺島に移転。寺島第3小学校へ転校。父、ブリキ職として一本立ち。

1931(昭和6)年、1929年に始まる世界恐慌が1930(昭和5)年に日本に波及。由五郎は失業一家は葛飾区四つ木三軒長屋へ夜逃げ。正子、四つ木小学校に転校。

1932(昭和7)年10歳 本田小学校へ転校。担任教師より綴り方の指導をうける。

「うさぎ」が『赤い鳥』に初入選、以後計7編入選。

1,933(昭和8)年11歳 放課後、深夜までセルロイド人形の彩色工場で働き始める。

1934(昭和9)年 彩色工場が倒産、後再開。

6月、渋江小学校(東四つ木2-13)新設により、同校へ移校(4回目)。

1935(昭和10)年 小学校卒業。レース工場女工として午前6時半から午後5時まで働く。

1937(昭和12)年 中央公論社「綴り方教室」刊行。60~70万部売れても、正子へ印税の支払い無し。

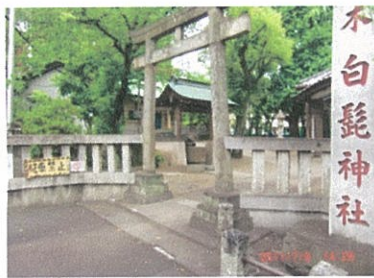


7月7日、日中戦争勃発

1995(平成7)年 岩波文庫の「新版 綴り方教室」が出版される。



左の写真は 1938(昭和 13)年、菊地寛の司会で高峰秀子(13歳)と豊田正子(15歳)とが雑誌対談した時のものを転載させていただきます。同年、山本嘉治朗監督、秀子主演の「綴り方教室」が封切り上映されました。



葛飾セルロイド工場発祥記念碑 (東京都葛飾区澁江公園)



葛飾区立渋江小学校。昭和9年6月開校。豊田正子も本田小学校6年の時、移校。

[VI] セルロイド加工の現場写真



1、裁断したセルロイド



2、上下の金型を温める



3、セルロイドを金型に挿む



4、ザーザーと水をかける



5、プレス場



6、バリ取り



7、彩色



8、彩色

写真は東京都足立区辰沼の平井玩具製作所です。

平井さんはプレスからバリ取り、彩色まで一人で作業をこなしています。世界で唯一のセルロイド人形師です。

これらの写真は、平成22年7月のものですが、セルロイドの作業現場は林芙美子や豊田正子が書いた文章の時代と全く変わりません。昔のままです。



[VII] 葛飾区東四つ木「町の文化と歴史をひもとく会」の編集誌があります。

「木根川の歴史2」に地元の調金師・石戸輝久氏が豊田正子「綴方教室」の原風景、をA4の本に23頁にわたって載せておられます。その中の■セルロイド人形の彩色工場、で次のように書かれています。

わたしの子供時分にも、このあたりでは個人経営でセルロイド人形の成型加工をする小さな作業場がいくつもあり、窓越しに仕事の様子を興味深く見入っていたものである。

成型された人形の合わせ目のバリ取りを内職としていた家庭もおおく、正子の母親のゆきも一時期この仕事に携わっていたことが、正子の長編小説『おゆき』（昭和39年）に出でくる。

『小刀で削り取るこの仕事は、子どもたちの捕ってきた川ガニがバケツの底を這い回っているような音をたてた。カリカリ……。小刀の指のあたるところにボロ布をまきつけて……。』  
とはその時の描写である。

それから20数年後のことだが、わたしがある日近所の友人の家へ行くと、薄暗いお勝手の板の間にセルロイド人形が山積みになっていて、彼の母親と祖母が人形のバリ取りをしていたのを思い出す。

指に布を巻いて小刀を握っていた姿は、まさしく『おゆき』に描かれた通りの光景であった。

\*

セルロイド加工業は染色工業と共に葛飾区の代表的産業のひとつであった。

大正3(1914)年渋江に千草セルロイド工場が操業されて以来、この地域でセルロイド産業が発展した。

昭和30年代初頭、区内には200のセルロイド工場とその下請けの内職屋が2000軒余りあり、海外へ輸出するセルロイド玩具の90%余りが四つ木地区で生産加工されていた。だが、輸出先のアメリカでセルロイド玩具の可燃性が問題視されるようになり、昭和30年以降生産が減少。セルロイドはプラスチックや塩化ビニールなどの新素材にとって代わられた。  
(東四つ木・町の文化と歴史をひもとく会編・木根川の歴史2より)

\*

後記。①彩色屋の文中に「渡辺さんの家は、大和ゴムのそばの露地を入った一番奥で」の表現がありますが、大和ゴムの跡地は、高層の都営・東四つ木4丁目アパート、になっています。②筆者は葛飾区四つ木4丁目の会社で暫く働いていました。